

自分の人生の主人公は自分だ！

作家 神渡 良平

横浜に光田敏昭さんが代表を務めている夢工房だいあん株式会社という工務店があります。光田社長（当時）は平成二年（一九九〇）、世の中が不動産投資に沸いたバブル経済が崩壊したとき、百八十億円の負債を抱えて、倒産寸前まで追いつめられました。金策がどうにもならず、月末が迫ってくるのが恐ろしくてなりません。ベッドに入っても寝られず、朝が来ないでほしいとうなされ、不眠が続きました。とうとう金策が尽き、自分の生命保険で従業員への支払いをしようと覚悟を決め、死に場所を探しました。そんなとき訪ねた友人の会社に大きな額が掛けてあるのに気づきました。

鳥は飛ばねばならぬ
人は生きねばならぬ

すばらしく雄渾な筆致で書いてありました。「これはどなたが書かれたものですか?」と訊くと、「坂村真民先生です。その詩の冒頭の二行を書いてもらいました。先生の詩にはとても励まされます」という返事でした。訪問の帰り、さっそく書店で詩集を入手し、公園の脇に車を止めて読みました。「鳥は飛ばねばならぬ」の全文はこう書いてありました。

怒濤の海を
飛びゆく鳥のように
混沌の世を生きねばならぬ
鳥は本能的に
暗黒を突破すれば

光明の島に着くことを知っている
そのように人も
一寸先は闇ではなく
光であることを知らねばならぬ

「シベリアを飛び立った鳥は怒濤の日本海を突破すれば、ついに光明の島に着くことを知っています。だから鳥は希望に向かって飛び続けます。そのように人間も一寸先は闇ではなく、光であることを知らねばなりません。光が射してくることを信じて、生き抜くのです」

真民さんは暗黒の先には必ず光明があると確信し、「覚悟」を持って取り組むべきことを勧めておられました。

「生き抜くことがあなたに与えられた使命です。生きて生きて生き抜いて、再度、再再度挑戦すれば、必ず道が開け、新しい天地がやってきます。それを信じて、生きて生きて生き抜くのです。そうすればまた人さまのお役に立てる日がやってきます」

真民さんがそう語りかけておられました。

◆仕事は私たちが裏切らない

光田代表は真民さんの詩「鈍刀を磨く」から、「仕事とはこういうものだ」というヒントを得ました。そこで真民さんの詩を使って社員を励ました。

鈍刀をいくら磨いても
無駄なことだというが
何もそんなことばに
耳を貸す必要はない
せっせと磨くのだ
刀は光らないかも知れないが

磨く本人が変わってくる
つまり刀がすまぬすまぬと言いながら
磨く本人を光るものにしてくれるのだ
そこが甚深微妙の世界だ
だからせっせと磨くのだ

「人間はこの仕事はいくらの利益になるのかと計算し、小さな面倒くさい仕事は手を抜いてごまかしてしまいがちです。でも仕事の中に自分の誠意のすべてを込めて努力したとき、たとえ儲けは少ないとしても、しっかり見ている人がいて、あの人は誠実だ、信頼できると評価してくれ、それが次の仕事に結びついてくるかもしれません。そうしたことが夢工房だいなんの評判となって、いい仕事をさせてもらえるようになるはずですよ」

こうして夢工房だいなんは見事に復活を果たし、現在は子息の大蔵さんが後を継いで、隆盛の一途をたどっています。仕事をどうとらえるかで、仕上がりはまるで変わってきます。「鈍刀を磨く」思いで取り組めば、必ず光り輝くようになってくるのです。

◆人生の杖となった真民さんの詩「タンポポ魂」

兵庫県宝塚市に住む公認会計士の西尾行正さんは学生時代に公認会計士の資格を取り、大手の監査法人に就職しました。一定の経験を積んだ後、平成九年（一九九七）六月、米国インディアナポリスに派遣されました。この都市に進出している日本企業と米国の企業の間で立って経理業務をしました。米国勤務中、米国の公認会計士の資格も取り、四年の勤務を終えて意気揚々と帰国しました。前途は洋々だと思われました。

ところが帰国一年目に脳溢血で倒れ、左半身麻痺になってしまいました。子どもはまだ一歳です。暗澹としました。そんな西尾さんを励ましてくれたのが、真民さんの詩「タンポポ魂」でした。これを読んだとき、「まるで私のことを言っているようだ。ここで挫けちゃいけない」と思い、詩を暗唱して自分を励ましました。

踏みにじられても
食いちぎられても
死にもしない
枯れもしない
その根強さ

そしてつねに
太陽に向かって咲く
その明るさ
わたしはそれを
わたしの魂とする

西尾さんは毎日一キロの歩行訓練を自分に課し、病院内を杖歩行でぐるぐる歩きました。病院の庭にも咲いているタンポポは踏まれても枯れもせず、健気に咲いています。その姿を戦友のように感じてがんばりました。

そのうち、病院の廊下を歩くだけではもの足りなくなり、外を歩くことにしました。まず挑戦したのが阪急宝塚駅の近くの遊歩道「花の道」で、そこを往復しました。それができるようになると、今度は甲子園大学まで往復二キロ。西尾さんにとっては約二時間のコースを歩きました。この道には勾配のきつい坂があるので、汗をたっぷりかいて歩きが良かったです。こうして杖つきながらではありますが、社会復帰に漕ぎつけました。

二年のブランクの末、通勤が始まりました。健常な人は宝塚から阪急電車、地下鉄御堂筋線を乗り継いで本町まで四十分かかります。西尾さんはそこを二時間かけて通いました。最初は週一日の勤務でしたが、今は週三日の勤務になりました。杖突きながらでもがんばる姿に、同僚が力をもっていると言います。

昔から「天は自ら助くる者を助くる」と言います。逆境に陥っても、何くそとがんばる人には道が開けてくるものです。